

ベ－チェット病友の会の発足に寄せて

このたび「ベーチェット病友の会」が発足し、いよいよ積極的に活動が開始される運びにいたしましたことは、年来この病気の研究と診療を続けて来た者の一人として、心から喜びに耐えないとともに、本会の結成にいたるまで、自からこの病気と闘いながらご尽力された方々にお礼とお祝いを申し上げます。

ベーチェット病は、口腔粘膜のアフタ性潰瘍、皮疹、眼障害、外陰部潰瘍のみならず、関節炎、血管系障害、消化器障害や、稀には中枢神経系障害も発現する全身病であり、その病変が反復しつつ慢性遷延性の経過を辿る難病である。私はこの病気の研究に従事して以来、次第にこの病気の様相を識るにつれて、これが明らかに全身病であることを知るとともに、従来考えられていた以上に、この病気が日本に増加しつつあることを知り、医学界に対しても本症についての啓蒙の必要を痛感した。すでに、眼科領域では荒木博士も云われるごとく、この病気による眼障害に関する研究、治療手段の開発は、おそらく今後の最も大きな課題の一つであろう。去る昭和39年12月イタリアのローマにおけるベーチェット病に関する国際会議には、日本から東大眼科教室の鹿野信一教授が参加されて、ベーチェット病の眼病変について詳細な発表をされたが、近年とくに第二次大戦以後この病気が、黄色人種とくに日本に増加している現象が注目されている。

私たちは、内科医としての立場から、全身病であるベーチェット病の究明、治療手段の開発に努めているが、現在ベーチェット病はスモンとは異なり、日本の各地に増加していると思われる。この病気と闘っている患者の数は、おそらく数万人という数であろうと思う。

ベーチェット病は決して稀有な奇病ではない。私の約20年にわたるこの病気の研究成績からみても、ベーチェット病が明らかな伝染病であるという確証はない。おそらく全世界に数万（日本でも数万名に達するであろう）の患者について、いまだ夫婦ともにベーチェット病に罹患したということを開かない。

「ベーチェット病友の会」が、この病気と闘いつつある患者さん達からの呼びかけで始まり、患者さん方の努力でこのように着々と運ばれたことは、考えると多くの意義を含んでいる。近年この病気に悩む患者が急増しているにもかかわらず、ベーチェット病に関する社会や国家の理解の少なさに対して、最近とみにこの蒙を啓く必要性が社会的にも問題となりつつあることは、当然であろう。

ベーチェット病と闘いつつある患者さん方相互が、励まし合い、その将来を明るくするために患者も研究者も、お互いに努力することは大切なことである。「ベーチェット病友の会」の発足に際して、本症の研究者の一人として心から祝福を申し上げます。

東京大学医学部物療内科

講師 清水 保

先ず「ベーチェット病友の会」の結成実現を心からお祝い申し上げます。

私共直接患者さんに接する医師として、臨床上、今迄考えられてきている全ゆる原因に対する処置を試みているのですが、はっきり申してこれという決め手がなく心を痛めています。特にこの病気が青壮年の働き盛りの人に多く、しかも現在のところ視力0.1以下に低下してしまう方が70%近くもあるという現実は大変な社会問題であります。

終局の目的は、当然原因追究、治療法の確立であり、この疾患をなくすことにありますが、それ迄の過程としてこの会の主旨にありますような患者さん方の生活に直接つながる経済的諸問題、社会復帰、研究費の助成等々、医師と患者との心の触れ合いを通してなすべきことが数多くあると思います。殊に眼科医として、日頃次のようなことを痛感しています。

即ち、この病気が異常な高失明率を持つこと、本症の特徴として失明後にも失明眼や口腔、皮膚その他の全身的炎症々状が反復して社会復帰の為の職業訓練に支障をきたしている由を屢々聞くこと、現在の医療施設、特に大学病院などでは眼科の場合、手術を要する疾患ですら予約で一杯で、ベーチェット病の如き慢性疾患に与えられるベットが止むなく限られてしまい十分な治療ができ難い場合も生じ得ること、などから、治療と同時に社会復帰につながる職業訓練等も行ない得るようなベーチェット病の専門施設の設立を望んで止みません。

ところで、ここで患者さんやそのご家族はじめ一般の方々に是非認識しておいて戴きたいことがあります。例えば、スモン病において感染症という言葉が出るにおよび、それが直ちに人から人への伝染病と誤解され、そのため社会的に疎外されたり、自殺者まで出したということが問題になっています。ベーチェット病関係者にはくれぐれもこのようなことのないように十分認識して戴きたいと思います。現在までのところ一般にベーチェット病には家族感染など人から人へ伝染するということはないと考えられているのです。又、仮に今後研究によって或るいはこれがウイルス、細菌など何らかの病原菌による感染症ということが確立されたとしても、これが直ちに人にうつる病気と早合点してはなりません。この点十分ご注意申し上げます。現に、ベーチェット病の患者さん達に接し、その血液などを直接取り扱って数年以上経つ研究者達にも患者さんから伝染したという話しを聞きません。又、患者さんの中で、既に失明に近くなって結婚し、健康な子供さんに恵まれ、幸福な家庭を築いている方もあります。

今後、患者、医師心を合わせてこの難病にうち勝つよう努力致しましょう。

「ベーチェット病友の会」の発展を祈ります。

東京大学医学部眼科教室

荒 木 誉 達